

# アキレス

## 最後の闘い

1-5 有志劇 ミナリオ (草稿)

アキレスの海 (エーゲ海)  
サイプロス (キプロス)  
アイトピア (エチオピア)



サントリン火山の地形図

作・演出 岡本義隆  
美術監督 尾崎茂一  
音楽 LED ZEPPLIN  
「Presence」より

79' 神無月

作・演出 岡本義雄  
美術監督 尾崎茂一

音楽 LED ZEPPELIN  
「Presence」より

下記の台本 Word 用テンプレートを使用し Linux 上の writer で編集しました(2022-06-26)  
<http://deerstudio.jp/inc/downloads/film-and-video/script-microsoft-word-template.html>

おことわり:この脚本には、現在の人権感覚からは用いない方がよい、「ジプシー」という用語が使われています。今日の学校演劇では「ロマの人々」など、現在広く用いられる用語と、いい換えた方がよいと思われまます。この脚本ではオリジナル原稿(1979-10-03)を尊重して、当時の用語で記します。  
またこの構成内容も将来的に変更される場合があります。従って本編を Ver0.0 とします。  
(2022年6月27日作者,脚本再構成にあたって記す)

「アキレス最後の闘い」 設定・登場人物表

時代：紀元前のギリシャ  
舞台設定：ロックオペラ風に⇒  
(詳しくは別紙)  
器材：スライド投影机 (スライド：彗星，星雲，火山噴火，戦災の街 etc.)  
ストロボ数台  
ドライアイス etc. (詳しくは別紙)  
大道具：パルテノン神殿風の大理石の柱の背景  
石のテーブル

役者⇒

アキレス (主人公) 戦いにたけた勇士だが、ふだんは心優しくしかも孤独  
テーセウス (ギリシャの王) 人生経験豊かな王だがすでに老いている  
カシオペア (テーセウスの妻) 貞淑な思慮深い后  
アンドロメダ (アイティオペアの王女) アキレスの恋人であるがアキレスの心をまだ  
良く理解できない  
ペネロープ (アンドロメダの妹) 茶目っ気たっぷりの皮肉屋さん  
トリトン (アキレスの弟分) 女の子のような美貌 平和を愛する  
老ケプラー (予言者) テーセウス王おおかえの星占い師  
オルフェウス (盗賊の頭 実はアキレスの双子の弟) すさんではいるがいつも心の中  
に熱いものを持っている  
カリオペ (謎のジプシーの占い師) 全くのなぞ  
キサナドゥ (マケドニアの傭兵隊長) ギリシャの乗っ取りをたくらむ腹黒い男  
兵士 A (A, Bはキサナドゥの部下)  
B  
C (C, Dはテーセウスに忠実な部下)  
D  
ほかに兵士 E (物見を兼ねる) , F, G  
  
母親 (アキレス兄弟の本当の母)  
女 A (幼いアキレスをテーセウス王にとどける)  
女 B (幼いオルフェウスをどこかに連れ去る)

《プロローグ》（ナレーション）

1871年、ドイツ人シュリーマンによって発掘されたトロヤは、はじめて伝説の奥に眠る歴史の正体を明らかにした。

しかし、トロヤが発掘された地層の奥深く、まだ我々の知らない、未知の文明が数多く眠っていることを、考古学者達は知っている。これは、そんなまだ人間が神に近かった頃のエーゲ海を舞台に繰り広げられた物語である。

## 1. 第一幕 新興国マケドニアに蹂躪されるテッサリア

（幕が開くと、逃げていく民衆とそれを追う兵士）

<スライド>

「燃える城壁」

ストボロ点滅

<音響 音楽「アキレス最後の闘い」テーマ>

照明 赤 ⇒ 暗転

（双子の赤ん坊を抱いた母親、下手から現われ、舞台中央で2. 3度左右に逃れようとするが、力尽きて、足から崩れ落ち中央へ倒れる。2人の女が現れ、母親の様子を見届けるが、やがて、それぞれ赤ん坊を手にとると、別々の方向に走り去る。それを追うように下手、上手より兵士が登場し、またそれぞれの方向へ走り去る-----）

-----暗転-----

（ナレーション）

かつて、エーゲ海に浮かぶ小国テッサリアは、北方に興ったマケドニアの軍隊によって蹂躪され、住民のほとんどは殺されるか、行方不明になった。幼いアキレスはその時、見も知らぬ女により助けられ、ギリシャの王テーセウスの元に身を寄せるようになった-----。

しかし、その時同じように母親に抱かれていた、双子の弟の行方はようとして知られていなかった。

-----それから時は流れて20年の歳月が経とうとしていた-----。

## 2. 第二幕 テーセウス王の宮殿ロビー（パルテノン神殿様の大理石柱の背景）

テーセウス	「皆のもの、今宵はギリシャにとって記念すべき夕べだ。このたびのサイプロスの闘いでは本当によく働いてくれた。キサナドゥ、特におまえには礼を言うぞ。」
キサナドゥ	「何をおっしゃいます陛下。傭兵隊長として当然のことをしたまで--。」
カシオペア	「しかしマケドニア軍はサイプロスの女・子供にまでずいぶんひどい事をしたと聞いています。」（
キサナドゥ	「ほうこれはまた意なことを。しかしおきさき様、いくさとはそういうものでございますよ。女のあなたにはわかりかねるかも知れないが、-----マケ

ドニア軍の荒っぽいことは、あのテッサリア以来の事ですからなあ、 ハッ  
ハッハッ

テーセウス (感慨深げに) 「----テッサリア-----そうか、あれからもう 20 年近くになる  
のだな-----」

カシオペア 「そういえばアキレスの姿が見えないわね？」

トリトン 「お兄さんのことだ。またどこかで考え事でもしているのでしょうか」

ペネロープ 「本当にアキレス様は人付き合いがお悪いんだから。あれでおじ様の後が継  
げるのかしら？ねえお姉さま？」

アンドロメダ 「おやめ！ペネロープ。人の悪口を言うものではないわ」

テーセウス 「まあ良いではないか。アキレスはあれで仲々のしっかりものだ。少し物事  
を考えすぎる傾向はあるが-----」

トリトン 「それにお兄さんは。戦場ではまるで人が変わったように戦うんだ。今度の  
いくさだって、サラミスで味方が危機一髪するとき、アキレス兄さんが一人で  
助けに来てくれたんだもの」

ペネロープ 「そうよ！そこがキサナドゥとは違う所だわ。マケドニア軍はいつも、いく  
さがギリシャの勝ちとはっきり分かってから、やっと重い腰を上げるくせに、  
手を合わせて逃れようとする敵には、こっぴどく追い打ちをかけるのだわ」

キサナドゥ 「ちえっ、すぐにアキレス、アキレスだ！あんな若造に何が出来るっていう  
のだ。第一、奴はギリシャの生まれではないはずだ。どこの馬の骨ともわか  
らない奴のくせに！それにお嬢さま、お嬢さま達だって、このキサナドゥが  
アイティオペアからお連れしなければ、今頃はどうなっていたか-----」

ペネロープ 「でもそれは----！」

テーセウス (話をさえぎるように) 「おまえ達！もうやめるのだ！今日は祝の席だ。争  
い事はつつしむのだ さあ皆の者ギリシャの栄光のために盃を上げよう！」

兵士 A 「いざ！たてまつれアーレスの神よ！」

兵士 B 「目覚められよ！プロメテウスよ！」

兵士 C 「累々 (るいりい) たるかな強者 (つわもの) 共の」

兵士 A 「緋色 (ひいろ) に輝く白盾 (アイギス) を」

兵士 B 「御覽ぜらるかなアテナの女神」

兵士 C 「わけても尊い白亜の弓を」

兵士 A 「青銅 (からかね) の雲より放ちたれば」

兵士 B 「いかに武勇のアカイヤ軍も」

兵士 C 「トロヤの夢と果ゆきし」

兵士 A 「いざ唄わんアポロンの唄を」

兵士 B 「ゼウス御身 (おんみ) がいかづちにかえて」

兵士 C 「ポセイドンの海を渡らば」

兵士 A 「オリンポスに朝日は昇り」

兵士B 「父なるゼウスますます雄々しく」

兵士C 「わが行く未をしめしたり」

(一同盃を上げて飲み干す。このとき下手より物見の兵士急いで登場  
テーセウスに耳打ちする-----)

テーセウス (顔色を変えながら) 「皆の者、今、物見より報告が入った---西空に大きなほうき星が出たそうだ---何か悪い知らせかも知れない! 祝の席だというのに」

カシオペア 「すぐに占い師をお呼びになられては?」

テーセウス 「よし」 (兵士Cに合図する。Cはすぐにケプラーを呼びに上手に去る)

アンドロメダ 「ほうき星といえば、あのアトランティスの王国が減んだとき、やはり西空に巨大なほうき星が出ていたと、私はおじい様から聞いたことがあります」

ペネロープ 「わたし何だか怖い」 (と姉に助けを求める)

テーセウス 「まあ落ち着くのだ (この時、老ケプラーが兵士Cに手をひかれ下手より登場。王に会釈する) さあこちらへ!」

「老ケプラーよ! ほうき星が西空に出たのだ。教えて頂きたい! ギリシャに何事が起こるのだ!」

老ケプラー (星占い師) (天をあおいで神の声を聞くような仕草) 「偉大なるギリシャの王よ! 悪い知らせだ! よくお聞きなさい! 大いなるアトランティスは神の怒りに触れて、わだつみの奥深く滅び申したが、ギリシャを襲う不幸はそのようなものではない-----それは人の形をした憎しみのなせる技だ!」

「オリオンの三つの星にロシナンテの星が並ぶとき、北の方から黒雲ギリシャをおおい、赤銅 (あかがね) の馬にのる兵士達が国境を越えるだろうそれがギリシャの不幸のはじまり-----」

テーセウス 「それはどういう意味だ!」

老ケプラー (それには耳を貸さず) 「しかし、不幸より逃れる方法が唯一つある。<ゴルディアスの結び目>を解き放つことだ。やがてテッサリア生まれの若者がそれを行うだろう。しかし彼は---決して---還ら---ない---」 (苦しように)

テーセウス 「ケプラーよ! そのゴルディアスの結び目とは何だ。そしてその赤銅の馬に乗る兵士達とは一体?」

老ケプラー 「それはこの----」 (キサナドゥを指差しながら倒れる)

テーセウス 「老ケプラーよ! どうなされた! (ケプラーに近寄って抱き起こす) いかん! 毒を飲まされている!」

カシオペア 「まあ誰がこんなひどい事を!」

キサナドゥ 「おそれながら陛下。こんな老いぼれの占い師を信じちゃいけませんぜ!! 何がギリシャの不幸だ! えんぎでもない--- さあ見苦しいこの老いぼれを片付けろ!」

(と兵士A・Bに命令する---A・B片付けようと近づく)

テーセウス 「待て! 丁重に葬るのだトリトン!」

トリトン 「はい！」（兵士C・Dと共にケプラーの身体を上手に引き上げていく）  
テーセウス 「キサナドゥ！お前はもう下がってよい！！」  
キサナドゥ 「かしこまりました陛下！」（兵士A・Bと共に上手に消える）

-----かわって、下手よりアキレス登場-----

カシオペア 「まあアキレス！」  
アンドロメダ 「どこへ言っておいでになったの？」  
アキレス 「あまりに星が美しいのでつい見とれていたのです。そう大きなほうき星が出ていました。何か吸い込まれそうな美しさだった-----」  
アンドロメダ 「そうその事で、いま占い師が殺されたのです！」  
アキレス 「な、何ですって！あのケプラーが！一体誰に！！」  
テーセウス 「この宮殿の中に、すでに裏切りものがあるのかも知れない」  
カシオペア 「占い師は不幸を予言して死んでゆきました。オリオンの3つの星にロシナンテの星が並ぶとき不幸が始まるのだと----」  
テーセウス 「北の方より赤銅（あかがね）の馬に乗った兵士が国境を越える----」  
アンドロメダ 「しかし、＜ゴルディアスの結び目＞を解くものが現れて、ギリシャを不幸より救う-----」  
アキレス 「その赤銅の馬に乗る兵士とは、一体----」  
「それにゴルディアスの結び目とは----」  
テーセウス 「老ケプラーはそれだけを言い残してこと切れたのだ----」  
ペネロープ 「おじ様、私達は一体----どうなるのでしょうか。まさかあのアトランティスのように----」  
アンドロメダ 「でもケプラーはその不幸を乗り切る方法が----」  
カシオペア 「そうゴルディアスの結び目を解く（ほどく）ことができれば----」  
テーセウス 「困った事になった全く----」

-----暗転-----

### 3. 第三幕 キサナドゥの詰め所

(ナレーション)

王達が宮殿で思案にくれていた頃、キサナドゥ達は詰め所で、何か悪だくみをひそひそと話し合っていた。

兵士 A 「それにしても、キサナドゥ様もう少しで俺達の計画に感づかれる所でしたね」

キサナドゥ 「ああ、毒を盛るのがもう少し遅ければなあ」

兵士 B 「しかし、さすがは隊長、手回しのいいことで-----」

キサナドゥ 「おう、時にお前たち、次はあのアキレスだ。あいつを片付けんことには！」

兵士 A 「それでどのようなご計画を-----」

キサナドゥ 「それはな-----」 (顔を寄せ合ってひそひそと悪巧みを告げる)

兵士 A・B 「ふんふんふん」

兵士 B 「それはよいお考えだ！！」

キサナドゥ 「しっ！！声が高い！！」

兵士 A 「アキレスさえ亡き者にすればギリシャ全土は隊長のものに」

キサナドゥ 「それにあのアンドロメダも俺のものだ」

兵士 B 「まことに飼い犬にてを噛まれるとはあのテーセウスもバカなお人だ！！」

<音響> 「雷の音」

キサナドゥ 「おうどうやら外は夕立だ。あの雷が俺達の前途を祝ってくれているぜ！！」

全員 「ふっふっふっ、はっはっはっ-----」

-----暗転-----

#### 4. 第四幕 再び王の宮殿

(ナレーション)

その夜、夕立の中でまたまた、1つの事件が持ち上がる。

<音響>やはり「雷の音」

(暗転の中に、兵士の叫び声と剣の触れ合う音、やがて照明がつくとともに、王の前に盗賊の頭オルフェウスが兵士によって引き出されるオルフェウス、やつれた服装と身体中に縄をかけられて登場)

テーセウス 「何事だ！騒々しいこんな夜中に！」

兵士 C 「陛下！やっとり押しさえました。この者が宮殿に忍び込んだ盗賊の頭（かしら）でございます」

テーセウス 「盗賊？ほうこの宮殿に忍び込むとは大した度胸だ---  
まだ若いな----名は何という？」

オルフェウス 「名前？そんなものは知らん、仲間は俺をオルフェウスと呼ぶ」

テーセウス 「オルフェウスが---いい名だ  
どこから来たのだ？」

オルフェウス 「南の方の島からだ. もっともそれまでも決まったねぐらなど, なかったけどね」

カシオペア 「あなたの両親は？」

オルフェウス 「さあ戦争で死んだと聞いている---- そんな事はどうでもいい 早く首を打ってしまえ！」

アキレス 「おじ上, 待って下さい 少しくこの者と話をさせてください.  
オルフェウス----とか言ったな. やつれてはいても, 年格好を見ればお前は俺と同じ位の年, なのになぜお前は盗賊の頭(かしら)などなったのだ？」

オルフェウス 「そういうお前は？」

アキレス 「俺はアキレス 両親は知らない. 物心ついた時からこのテーセウス王の宮殿で育てられたのだ！」

オルフェウス 「そうか. お前がああ英雄アキレスか！これは会えて光栄だぜ！しかし, こんな宮殿でぬくぬくと育ったお前のような奴には, おそらくわかるまい. 粗末なテントの中で, 飢えと毒虫に攻められ続けた俺の生活などはな！----幸せな人間にいくら不幸な運命を話したところで無駄なだけだ！」

アキレス 「いや, いいから話してくれ. 確かに俺はいくさの中では英雄だった. そこでは俺の人生は無限に広がるように見えたさ. しかし俺はやはり一人だった. 俺は一人になると無性に知りたくなるのだ. 人が生きるとは一体どういうことなのか---それが仮に盗賊という, 世界に背を向けて生きる道だったとしてもだ！」

オルフェウス 「ははは----若いなアキレス. 俺にはお前の若さが眩いばかりだ！しかし生きることに理くつなどいらぬ. それは運命だよ. ただ運命のままに生きるという事だ. 誰も自分の生まれ落ちた星には逆らえないのだ. それに気付くのにそれほどヒマはいらないぜ. 俺と同じような生活を1年も続ければ, 自ずとさどってしまうのだよ！」

アキレス 「しかし----」

オルフェウス 「まあ聞け. 俺にもお前に似た正義とか未来だとか言うものに, 少しは情熱を持った事もあったぜ----ゴホンゴホン(と咳き込む)しかし人間とは虚しいものよ. 汚れれば汚れるほど, その汚れきった水から離れられなくなる. お前はいくさに勝ち続けた人しか見ていない. いくさに負け流浪する者達の悲惨を何一つ知らない. 国が負けただけではない. そこに生きていた者達の心の底までが, 憎しみに塗り替えられてしまうのだ. 俺は夢を憎しみに変えた. 俺が生き延びるためにな！その日から俺の中で神は死んだのだ！----ゴホンゴホン さあもう言い残すことはない. これも俺の定めだ----早く首をはねてくれ！！」

テーセウス 「さあどうしたものか----」

アキレス 「おじ上, 私からお願いします. どうかこの者の命だけは助けてやって下さい」

カシオペア 「私からもお願いします」

テーセウス 「仕方がない お前達が言うのなら----よしとりあえず牢につないでおけ」  
(兵士C・Dオルフェウスを連れていこうとする)



オルフェウス 「アキレス. お前もおせっかいな奴だ. だが礼はいわないぜ」  
 アキレス 「いいとも」 (と前の布をたくし上げ, 胸を張る)  
 オルフェウス (連れ出されようとするが, ふいにアキレスの胸元に注目して) 「お, お前  
 その首の瓔珞 (ようらく) は!」  
 アキレス 「ああこれか. よく知らないが俺の小さな時からの唯一の持ち物だ. これが  
 どうかしたのか?」  
 オルフェウス (急にあわてて) 「い, いや別に-----つまらぬ事を聞いた. さあ連れてって  
 くれ」  
 (兵士 C・D オルフェウスを連れて上手に去る)  
 カシオペア (それを見送りながら) 「ああした若者が幾人も心を蝕まれて消えてゆくので  
 ですね-----」  
 テーセウス 「ああみんな戦かいのせいだよ!」  
 トリトン 「なぜそんなにまでして戦いをする必要があるの?」  
 ペネロープ 「そうよ! それに答えることができたなら!」  
 (一同うなずく)  
 テーセウス 「今宵は色んな事が起こった もう遅い, さあみんな眠ろうじゃないか-----」  
 カシオペア 「そうね」  
 (一同上手の方に去ってゆく)

-----暗転-----

## 5. 第五幕 王の宮殿 (その夜更け)

(ナレーション)

余りに一度に多くの事件の起こったその夜更け. 宮殿の人々は思い思いの不安を胸に眠れない夜を過ごしていた

スライド 星空

(影の声) <音響で影の声をセット>  
 カシオペア 「アキレスにはあの事はいつ話されるおつもり?」  
 テーセウス 「ああ, 近いうちにしようと思っていたが, あの予言を聞いてからは心が変わった. しばらくは伏せておこう」  
 カシオペア 「しかし, いつかわかる事ですわ」  
 テーセウス 「だが今はだめだ. キサナドゥが仇とわかってしまえば, あのアキレスの事だ. きっとキサナドゥを撃とうとするに違いない. 今, ギリシャ軍が内輪もめをするのは, もっとも避けなければならない」

カシオペア 「なぜそんなにまでしてキサナドゥをかばわれますの？」

テーセウス 「今のギリシャには、どうしてもあのマケドニアの軍事力を味方につけておく必要があるのだ-----どうしても-----」

(しばらくの沈黙)

ペネロープ 「ねえお姉さま」

アンドロメダ 「何？ペネロープ」

ペネロープ 「あのキサナドゥって奴、どうしても虫が好かないわ」

アンドロメダ 「そうね、私達がアイティオペアから連れて来られたのも、何か魂胆があるのかも知れないわね」

ペネロープ 「ああ、アイティオペアに還りたい」

アンドロメダ そうね----いつかは-----さあもう寝なさい

(しばらく沈黙)

(ナレーション)

その頃アキレスはただ一人、ぼんやり城壁の外に佇んでいた。遠くにジプシー達の焚くかがり火が、蜃気楼のように揺れている。

<音響> こおろぎのなく声

(遠くを見ながら、ぼんやりたたずむアキレス。アキレスの耳に今日の夜のいくつもの声が聞こえてくる) アキレス舞台に佇んでいる

(影の声) <音響で影の声をセット>

テーセウス 「北の方より赤銅(あかがね)の馬にのった兵士が国境を越える」

オルフェウス 「しかし、こんな宮殿でぬくぬくと育った、お前のような奴に恐らくわかるまい」

カシオペア 「オリオンの三つの星にロシナンテの星が並ぶとき、不幸が始まるのだと---」

オルフェウス 「ははは、若いなアキレス----」

トリトン 「なぜ、そんなにまでして、戦いをする必要があるの-----」

オルフェウス 「しかし生きるということに理屈はいらない。それは運命だよ---」

アンドロメダ 「しかし、ゴルディアスの結び目を解く者が現われて、ギリシャを不幸より救う----- etc. -----」

<音響> エコー 救う 救う 救う---

(アキレス、頭をかかえてうずくまる)

アキレス 「解らない！俺には何一つ解らない！一体俺にどのように生きろというのだ！英雄アキレスか！しかしその英雄を助けてくれる者は誰もいない――」  
(うづくまるアキレスのそばにアンドロメダが近づいて)

アンドロメダ 「やはりここにいらしたのね」

アキレス (立ち上がりながら) 「ああ、君か――」

アンドロメダ 「さっきペネロープはすやすやと眠りはじめました。あの子は本当に天真爛漫なのですわ――あら、もうあの不気味なほうき星も沈んで、夕立もすっかり晴れましたのね――きれいな星空――」

<スライド> 星空・星雲

アキレス 「うん」

アンドロメダ 「外で何を考えてらしたの？」

アキレス 「うん」

アンドロメダ 「まあ、さっきからそんなご返事ばかり――最近のアキレス様は何か変よ！いつもぼんやりした目で、遠くばかり御覧になっている。英雄らしくないわ！」

アキレス 「アンドロメダよ！君には人生が広い野原のようにしか視えない！君は花や草たちや小鳥の唄を感じるだけだ。けれど僕には人生が深い峡谷のようにしか見えない。誰も僕のまわりにはいない――暗い岩石の淵があるばかりだ！――」※1

アンドロメダ 「あなたは自分を苦しめて、お喜びになっているのだわ。人は誰でも幸せな家庭を築き平凡な生活の中で、いつしか年老いてゆくのですわ。私はさとしたのです。人質同様にあのキサナドゥによって、アイティオペアから妹のペネロープと共に、この宮殿に連れて来られたとき、もう私の青春は終わったのだと――」

アキレス 「そうかも知れない。けれども戦いの中では、僕よりもっと勇気と知恵を持った若者達が僕より早く死んでいった――ちょうどあのフォルフェウスのように心と身体をボロボロに刻まれて――」

アンドロメダ 「でもきつともうすぐ平和な時代が来ますわ――」

アキレス 「そうだろうか。そう僕は最近よく夢を観るのだ。遠い昔のどこか生まれ故郷で母に抱かれている夢だ。けれど私には遠い日の記憶は全んどない。物心ついてからはテーセウス王のもとで育てられた、何不自由ない生活があるばかりだった。学問も武芸もギリシャの教育を受けた。いつしか人々にも英雄として名が知られるようになった。しかし私にはどうしても埋められない過去の空白があるのだ！」

アンドロメダ 「かわいそうなアキレス」

アキレス 「わずかに私の小さい時の記憶にあるのがこの瓔珞だ！この瓔珞が私の過去につながっているはずなのだが――」(瓔珞を握りしめて呟う)  
「^^夢を忘れたカナリアは裏のお山に捨てましょか いえいえそれはかわいそう――」

アンドロメダ 「何て悲しい唄」

アキレス 「夢の中でだけ、私は私の幼い日に戻ることができる。見も知らぬ母に抱かれてこんな子守唄を聞いている安らかな日々だ----それに」 (はっとして口をつむぐ)

アンドロメダ 「それに----どうかなされて---

アキレス 「いやいつも夢の中でもう一人同じように抱かれた赤ん坊がいたような気がしたのだ----いやいや気のせいだ.もう戻ろう.寒くなってきた」

(二人、下手に戻りかけるが、人影に気付く)

アンドロメダ 「誰かしら、こんな夜更けに。私怖い」 (とアキレスの陰にかくれる)

アキレス 「どうやらジプシーの婆さんのようだ。そうだ彼女なら知っているかも知れない」

(カリオペ登場)

カリオペ  
(ジプシーの占い師) 「これはギリシャのお方じゃな。こんな夜更けに外に出ておられるのは何かお悩み事でもあるのじゃろう。占ってしんぜよう」

アンドロメダ 「何だか不気味な人よ 帰りましょう」

アキレス 「お婆さん教えて頂きたい事が一つある。<ゴルディアスの結び目>とは何のことだ。どうしてもそれを知る必要があるのだ！」

カリオペ 「ゴルディアスの結び目 ほうこれはまた珍しい事をおたずねになる」

アキレス 「知っているのか」

カリオペ 「ジプシーの古い言い伝えにございます-----大いなる天と平らかなる水の境目を結ぶ、結び目がこの世界に九つございます。その結び目がこの地上の空気と火と穀物の恵みを、つかさどるとされているのでございます」

アキレス 「そうか。それでそのゴルディアスの結び目はどこにあるのだ？」

カリオペ 「ここから遠くないアイギウスの海の真ん中にあると聞いております」

アキレス 「そのゴルディアスの結び目をほどくにはどうすればよいのだ！」

カリオペ 「いやその結び目は、神が決められたときにほどかれる他、めったな事では-----ただ-----」

アキレス 「ただ----？」

カリオペ 「神の宿る土地の出のものだけが、それをほどく場合があると聞いております--」

アキレス 「その神の宿る土地とは？-----」

カリオペ 「さあ、そこまでは私も-----ただその結び目をほどいた者は決して戻らないと伝えられているのです。-----さて私の存ずるのはそこまで-----ほれあの様にロシナンテの星が昇り申した。何か異変が起こりますぞ-----」

<スライド> ロシナンテの星

それでは失礼----- (と帰りかけるが) おや、あなたのその首にかけておられる瓔珞。それはテッサリアの文様 (もんよう) -----そうかあなたがテッサリアの-----」

アキレス 「テッサリア？それは一体？」

アンドロメダ 「テッサリア？どこかで聞いた覚えがあるのだけれど」  
 (そのすきにカリオペは上手へ去る)

アキレス 「ああ、もう行ってしまった」

アンドロメダ 「不思議なお婆さんね」

アキレス 「ああ、しかし段々と解ってきたような気がする-----  
 さあ本当にもう帰ろう まもなく夜があける！」

(ナレーション)

アキレスとアンドロメダがジプシーの不思議なお婆さんに会い、ゴルディアスの結び目の秘密の一部を手にすることができました。しかしその次の夜、老ケプラーの予言が現実となるときがきたのです。

## 6. 第六幕 再び王の宮殿 (翌日の夕方)

<音響> 人々の走り回る音・扉の開け閉めする音  
 (宮殿の人々があわてふためき騒然としている)

カシオペア 「あなた、やはり宮殿の中にはいないわ」

兵士 C 「城壁の外もくまなく探しましたが、どこにもおられません！！」

アンドロメダ 「お昼までは私と一緒に眠っていたのです。私が先に起きて散歩に出た間にいなくなったのです。私はまた、どこかに出かけたものと思っていたのですが」

兵士 D (あわてて駆けつける) 「陛下！ キサナドゥ達の詰め所がもぬけの殻です。そこにこんな張り紙が！」

テーセウス 「何！？ (紙に目を通しながら) テーセウス殿へ。ペネロープを返して欲しいければ、あすサントリン島へアキレスを一人で寄こすこと。かならずアキレス殿一人で来て頂きたい キサナドゥ  
 -----しまった！裏切り者は奴だったのか！！」

アキレス 「そうか。奴は最初からそのつもりだったのだ。わしの元で表面は忠誠をつくしながら、略奪によって着々と勢力をたくわえてきたのだ。腹黒い男だキサナドゥという奴は！！」

カシオペア 「あの死んだケプラーの言った赤銅の馬にのる兵士たちとは、マケドニア軍の事だったのね-----」

アキレス (少し考えたあと) 「私が行きましょう。実は昨夜、妙な老婆に会ったのです。その老婆はゴルディアスの結び目が、アイギウスの海の真ん中にあると言ったのです。今そのキサナドゥから呼び出しを受けたサントリン島こそ、まさしくゴルディアスの結び目なのです」

アンドロメダ 「なる程、老婆の言った通りだわ」

テーセウス 「いやだめだ。おまえを行かすわけには行かない」

アンドロメダ 「なぜなのおじ様？」

テーセウス 「老ケプラーの最後の言葉を覚えているか？  
テッサリア生まれの若者がゴルディアスの結び目をほどくが、彼はけっして  
還らない----」

カシオペア 「私から話しましょう。今まであなた方には黙っていたのですが、今から 20  
年前、戦乱のテッサリアから来た一人の貧しい女の人から、子供を受け取り  
ました。最初はひ弱な子供でしたがすぐに字を覚え、剣のさばきもみるみる  
上達しました。私達には子供がありませんでしたから、その子にギリシャの  
王を継がせようと一心に教育をほどこしたのです。このアキレスがその子で  
す----」

アキレス 「そうか。テッサリアは俺の生まれ故郷か！！----これで全部解けた！！」

アンドロメダ 「だからあなたは行ってはならない。あの老婆も結び目をほどいた者は還ら  
ないと言っていたでしょう」

アキレス 「いや、私が行かなければペネロープはどうなるのだ。やはり私が行くのだ。  
予言どおりであれば、それでギリシャは不幸から救われる！！」

テーセウス 「しかし----」  
**(その時、下手よりオルフェスの声、いつの間にか牢を破っていた)**

オルフェウス 「いいや兄さん、兄さんが行く必要はないぜ！！」 (舞台の陰から)

アキレス 「その声は---あっ、お前は！」 (オルフェウス微笑みながら登場)

テーセウス 「何としたことだ牢に入れたはずなのに----」

オルフェウス 「ふふふ、盗賊の頭をみくびっちゃいけない。あんな牢の一つや二つ破れな  
いでどうする---それより話は全部、牢の外で聞かせてもらったゴホンゴホン  
俺がサントリンに行くよ！！」

アキレス 「しかしお前は！」

オルフェウス 「昨晚、お前のその瓔珞を見たとき、どこかで見覚えのあった。それはテッ  
サリアのものだったからな！！その夜更け、お前は城壁の外で唄を唄った---  
---俺が小さい頃、忘れもしない唄だ。^^夢を忘れたカナリアは-----  
さあこれでわかったろう、俺はアキレスの双子の弟オルフェウス、真正正銘  
のテッサリア生まれだ。盗賊の頭(かしら)がゴルディアスの結び目を、ほ  
どいちゃいけないってことは、誰も言わなかったぜ！！」

トリトン 「そういえばオルフェウスはアキレス兄さんにそっくりだ！！」

アキレス 「いや、やはり弟とわかった以上お前を行かすわけにはいかない」

オルフェウス 「アキレス！いや兄さん！よく聞いてくれ！！ゴホンゴホン  
俺はこのとおり、胸を患ってしまった。自分が長くない事位わかっているの  
だ。どうせ死ぬなら、少しはましな死に方をさせてくれ！」

アキレス 「しかし」

オルフェウス 「弟の頼みだ！ゴホンゴホン、昨日も言ったように俺は余りに暗いものばかり  
見すぎた。俺の人生は最初からボタンを掛け違えたように、どこかが狂っ  
てしまっていたのだ。けれど最後ぐらい何か人のために---ゴホンゴホン

いつも運命に流されていた俺が、最後だけは俺が自分の運命を決めるのだ  
さあ兄さん、今から俺が兄さんの身代わりだ  
兄さんのいつもつけていた盾とよろいを貸してくれ！  
兄さん！そして宮殿の方々よ！どうか俺のために、ギリシャの神々に祈って  
くれ！！」

—————暗転—————

(ナレーション)

こうしてオルフェウスはアキレスのよろいをつけ、サントリンに乗り込んだ  
サントリン島ではキサナドゥ以下マケドニア全軍がアキレスの来るのを待ち構えていた。物語はいよいよ  
クライマックスを迎える

## 7. 第七幕 サントリン島

<スライド 火山島の景色>

兵士 A 「隊長 アキレスが来ましたぜ たった一人で」

キサナドゥ 「何たった一人で？」

(オルフェウス登場 頭にベールを纏うこと)

オルフェウス 「キサナドゥ！！約束通り来たぜ！ おっとその前にペネロープをこっちに返してもらおうか」

キサナドゥ 「お前さえやってくれば、こんな小娘に用はない。さあくれてやるぜ」 (と兵士に命じてペネロープを押し付ける)

オルフェウス (ペネロープを抱きとり) 「いいか、俺を送ってきた船が港で待っている。すぐに行ってお前は、テーセウス王の元に帰るのだ！すぐに！」

ペネロープ 「でも」

オルフェウス 「いいからさっ早く」 (ペネロープを港の方に押しやる)

キサナドゥ 「ふん一人でのこのこやってきたか (オルフェウスの周りを回りながら) ここがお前の墓場だ！いくらギリシャの英雄アキレスといえども、このマケドニア軍を背にしては戦えまい！」

オルフェウス 「このような汚い事、俺達の仲間といえどもしなかったぜ！！」

キサナドゥ 「ええい、かまわんからひっくくれ！！」

(兵士 A・B&E・F・G——オルフェウスをとり巻く)

オルフェウス 「いいか、マケドニアの腰抜け共よ！ギリシャの英雄アキレスの戦いをとくとみるのだ！！ (オルフェウス 剣を抜く)

<音響> 「アキレス最後の闘い」メインテーマ

(音楽に合わせた殺陣と踊り)

(最後にオルフェウスはキサナドゥを追い詰める

しかし兵士の放った矢が、右のかかとにささって動けない)

<音響> 矢を放つ音+矢が刺さった瞬間に音楽ストップ

キサナドゥ 「ふふふ、いかにアキレスといえども、かかとを射抜かれれば立てまい  
さあその首もらいうけた」（とオルフェウスに近づいてベールを取る）  
「やっ、お前はアキレスではない！！」

オルフェウス （キサナドゥの手を振り払って）「そうだ、お前に幼い時、双子の兄弟を引き裂かれた弟のオルフェウスだ！！」

キサナドゥ 「ええい、者共、首をはねい」

（兵士達、駆け寄ろうとする時、耳を聳する爆発音、サントリン火山が大噴火を始める。兵士達は天をあおいで狼狽する）

<スライド 火山噴火、音響 火山の噴火爆発音、ストロボ点滅>

キサナドゥ （天をあおぎながら）「おお！これは何事だ」

オルフェウス （足で這いながら、キサナドゥに駆け寄り、一気に胸を剣で突く）  
「キサナドゥ！地獄へ行け！！」

キサナドゥ （キサナドゥ、唸りながら倒れる）

<音響 轟々と響く噴火の音>

（火山弾 降り注ぐ中を兵士達、走り回りながらある者は力尽き、ある者は火山弾に打たれて死ぬ）

（ナレーション）

このようにして、サントリン島は噴火を始め、マケドニア軍はその火山弾と灰と溶岩の中で壊滅した---  
--.夜になっても噴火は続き、サントリン島はエーゲ海のどまん中に、赤々とした火を灯し続けた。この時テ  
ーセウス王の館では一睡もせず、この島を見守り続けるアキレス達の姿があった

## 8. 第八幕 再び王の宮殿

<スライド 噴火する島の遠景>

テーセウス 「サントリンはまだ燃えているのか？」

兵士 C 「王さま！王さま！大変です。サントリン島が海の中へ沈み始めました」

テーセウス 「何！島が沈み始めた！！」

（一同立って下手の方に並ぶ）

カシオペア 「やはり予言は本当だったですね」

アンドロメダ 「ゴルディアスの結び目はほどかれたのね！」

アキレス 「まるで幻を視ているみたいだ---」

兵士 D 「ああ島が沈む！」

テーセウス 「そうだこれでギリシャに平和がもどるだろう----しかし-----」

ペネロープ 「私のためにオルフェウスは死んだのだわ 私のために！！」（と泣き出す）



アンドロメダ (アンドロメダは妹を抱いてなぐさめる)

トリトン 「あっ兄さん大きな流れ星」

<スライド 流れ星>

(一同上を向いてため息を上げる)

アンドロメダ (妹を抱きながら) 「オルフェウスの魂がとんでいくのかわ!!」

アキレス 「オルフェウス! いやお前が本当のアキレスなのだ!!  
真の勇気を持ち、人々の苦しみを知り抜いた  
おまえが本当のアキレスだった!!」

テーセウス 「見なさい! サントリンの火が段々消えてゆく-----」

アキレス 「そうだオルフェウス! いやアキレスよ!  
あの火がおまえの最後の闘いなのだ!  
オルフェウスよさようなら!  
ギリシャの英雄アキレスは今死んだ!!」

テーセウス 「アキレス! 私はすでに老いた。私を継ぐのはおまえだ!!  
再び栄光のギリシャを取り戻すのはおまえだ!」

アキレス 「いやおじ上! 私はもう王などにはならぬ!  
これからギリシャの人々一人一人がギリシャの王になるのだ  
私はこれからただの人間として生きてゆく  
戦争ではなく平和の意味を求めて  
強い者ではなく弱い者の心を知る  
そういうただの人間として生きてゆくのだ!」

テーセウス・カシオペア 「アキレス!!」

アキレス 「おじ上、さようなら私はやはり旅に出ます  
どこまでも私の生まれ故郷、テッサリアを求めて-----」

アンドロメダ 「私もお供するわ-----」

(アンドロメダがアキレスの後を追い始めたところで、ストップモーション  
スポットが次々消えて ⇒ 暗転、役者はそのまま動かない)

(ナレーション)《エピローグ》

アキレスのいた頃のギリシャを知る者は誰もいない。わずかに神話の中に彼らの名前が、神や神の子として記録されているだけだ。サントリン島は紀元前 1400 年頃大噴火し、その山体の大部分を海中に沈めた。プラトンはその光景にヒントを得て、アトランティス伝説を書いたと言われるが定かではない。トロヤ戦争のはじまる少し前、ギリシャにこんな物語があったことさえ知る者は、もう誰もいない-----。

(⇒静かに幕が降りる)

(引用) ※1. 吉本隆明詩集「初期詩篇」より

